世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

むさしのまつり

メタデータ	言語: ja 出版者: 武蔵野大学武蔵野文学館 公開日: 2024-07-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土屋, 忍 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000351

むさしのまつり

土屋　忍

むさし野文学館が五周年を迎えた。二〇二三年一一月のミーティングでは、同年上半期の来場者数が一〇〇〇名を超えている、と報告された。オープンキャンパスや摩耶祭だけではなく、通常期間においても特別展示をおこなった結果である。

文学館の「館」が竣工され開館するに至ったのは、秋山駿・秋山法子ご夫妻のご寄付のおかげである。それ以前の「館」なし文学館の活動、一〇年ほどの歩みを少しでも知っている卒業生からしたら、驚天動地に感慨無量、やがてあふれ出る感恩戴徳といったところだろうか。

二〇〇八年におずおずと始まった「館」なし文学館時代においては、キャンパスの片隅が活動場所だった。秋山駿氏から寄贈された旧蔵書の整理が最初の取り組みだった。集ってくれた学生や院生に恵まれ、何度か特別展示をおこなうことができた。学内の空いている場所を借りて一日だけ開催する形式に限られ、図録の刊行の予算は一〇万円未満であったが、内容は充実していた（と思う）。展示を行うための企画から準備、設営、原稿執筆から印刷、パネル展示の制作、会場レイアウトから撤収、広報に至るまで、その都度集まった学生や卒業生とおこなった。暗中模索、途方に暮れながらも独自に展示のやり方を試行錯誤し、なんとか形にすることができた。

文学館としての展示は、自作できることがわかった。展示に向けての研究会を行い、企画を立てて、調査とその成果を言語化し互いに推敲する。準備期間を経て実際に展示を開催し、その成果を図録にまとめる。スケジュール感ももち得ず、先の見えない行程を何度か繰り返し、心身を消耗しながら当日を迎えることになったが、中身のあるものを公開する方法論を身につけた。望外の数の来場者が訪れ、長時間滞在してくれた。取材も受けた。主に市民で賑わい、評判もよかった。その場で反応を確認できたので、励みにもなった。話を聞きつけて手伝ってくれる人も

増えた。しかし、一日限りの特別展示に向けての手作りの作業であり、場所と予算が確保されている他の文学館や美術館、博物館とは設備や見栄えの点では比べようもなかった。展示物制作の専門業者に依頼することもできなかったので、時間をかけて、楽しみながらの共同作業となった。

文学館の経営と運営に関しては素人でしかない私たちは、こうして一〇年を超える道のりを細々と歩んできた。その間、秋山ご夫妻をはじめとする多くの個人や団体からのご支援を賜り、文学館の諸活動が実現した。「西東京と紡ぐ文学」製作委員会を立ち上げ、二日間の学外展示依頼を承り、会場への来場者数がのべ一〇〇〇名に達した。製作した映画「ウエスト・トウキョウ・ストーリー」が渋谷の劇場で公開され、連日、満席となった。充実したパンフレットも刊行することができた。子ども向けの本のイベント「ワクワクことばのひみつきち」を実施し、厚生労働省から表彰された。秋山駿追悼シンポジウムと秋山法子展を開催し、『秋山駿蔵書目録』を刊行した。土岐善麿の校歌に関する調査結果を発表し、喜多能楽堂などで土岐善麿展をおこなった。小谷忠典監督による映画「たまらん坂」（黒井千次原作）を製作し、マルセイユ国際映画祭にてワールドプレミア上映を果たし、全国の劇場で公開された。

実務のためのプロフェッショナルが常駐していない当文学館では、学生の卒業とともに構成員が毎年大きく変わる。そのため、恒常的なプログラムを主体的かつ持続的に続けることは困難を極める。その都度実現できる企画をゲリラ的に実施することとなった。いきおい打ち上げ花火的にもなり、一回の事業の規模が大型化し、内容も多岐にわたる結果となった。

「館」なし文学館として二〇〇八年に活動を始めてから一二年後の二〇一九年、ようやく「むさし野文学館」が誕生した。「館」のある文学館ができて今年（二〇二三年）で五周年。この五年のうちの三年はコロナ禍である。その間、水谷俊博設計事務所＋武蔵野文学館による「むさし野文学館」がグッドデザイン賞を受賞した。また、館長（私）が読売新聞紙上で「文人の武蔵野」の連載を開始し、現在に至る。しばらく図書館管轄だった「大河内昭爾文庫」を文学館に移管しその整理にも着手した。しかし、東京都と武蔵野大学により行動が制限されていたため、活動の中心はWEBの製作やSNS発信となった。

ここまで、五周年の五年を含むこれまでの一七年ほどをざっと振りかえってきたが、一貫して大切にしてきたことがある。それは、学術的な正確性である。文学館の諸活動を支える三本柱は、研究と創作と制作ではないか。学術的な調査と検証に基づいて発信する研究、その成果を独自に表現する創作、そしてそれらを作品（メディアにおける制作物）にして世に出す制作である。紹介記事の執筆であっ

ても、エッセイや動画などであっても、ホームページやSNSであっても、最低限の正確性を重んじるのなら、インターネット上の情報だけを参照するのではなく、初出誌など（現物）を含めた然るべき文献調査を経る必要がある。インタビューをおこなって記事を書くにしても、聞き取りした発言内容が事実に基づくものかどうかを検証しなければならない。最先端の文学研究の水準を踏まえた記述を心がけ、先行する調査報告や論文、作品、制作物を見極め、尊重し、新見と独自性を重視する。後から修正すればいいという考えから、明らかに未完の原稿をそのままインターネット上に記事として公開するという行為は控えなければならない。できるだけ多くの人たちに伝わるわかりやすい表現を目指し、正確な表現を探すよう努めたい。それが、扱う対象となる過去の作家や作品への最低限の礼となる。もちろん、作家個人に寄り添いすぎると学問的客観性を見失うことになりかねないので、その点での注意も必要である。文学館が制作する展示物や図録、ポスターやチラシ、動画などは、予算の都合により手作りの水準に留まる仕上がりであることがほとんどとなるが、内容面は専門家、研究者が監修する。映画「たまらん坂」のように斯界で通用する作品も創作する。大学内にある文学館なので、こうした特長はこれからも変わらないものと考えている。

最後に、文学館の次の五年を見据えて展望を書いておきたい。自由に増殖する文学館を目指し、増殖可能な文学館を構築する。「万葉集」の東歌の中に「むさしの」という音が地名として登場して以降、およそ一三〇〇年、関東一円を中心に広く活用される言葉となったのが武蔵野である。武蔵野と名指されている場所は実に広い。おそらくは、悪いイメージがまったくないのだろう。多くの人たち、多くの公共施設、多くの商業施設、多くの教育施設、多くの団体、多くの商品（特にお菓子類）が便利に自由にこぞって用いて現在に至る。「武蔵野」を縁とするそれらが一堂に会し、〝むさしのまつり〟を催したらどうだろうか。